

基礎と実践力が身に付く臨床検査の教科書 薬立つ検査値

監修：林 松彦

編著：斉藤嘉禎、大森智史

医薬品を社会（地域）に過不足なく、必要とするところに的確に迅速に供給し、住民が医薬品を適正に使用できる体制を確保しておくこと。これが「医薬分業制度」である。

この制度は、1956年4月「医薬分業法」の法律のもと施行したが、わが国では、医師が診察と投薬をすることが習慣として定着していたため、分業は進展しなかった。

その後、1974年、分業元年といわれ、実質的な医薬分業の開始となり、2023年度の処方箋受取率（医薬分業率）は、前年度比3.9ポイント上昇して80.3%を示すまでに至った。

そのようななかで「モノから人へ」と叫ばれ、患者への面談、副作用・服用状況の確認が進んでいる。この「モノから人へ」の対応に苦難している薬剤師が数多くいる。

調剤報酬で「服薬管理指導料」に「服薬期間中のフォローアップ」を要件に明記した。それを受けて日本薬剤師会では「薬剤使用期間中の患者フォローアップの手引き」を作成し、啓発に努力している。

このような背景のなか、人に寄り添うための補助ツールとして、以前から院外処方箋内に「臨床検査値」の表記が進んでいる。表記項目はさまざまであるが、調剤薬局薬剤師においては処方箋の情報のみから一歩踏み出すことになった。しかしながら、薬学教育では「臨床検査値」に関する教育が十分とはいえない。

本書は臨床検査値の「基礎知識」から始まり、「検査値から患者の状態を把握する」記述も含まれて構成されている。例として「糖代謝検査」の項目を紹介する。

項目の冒頭には、「糖代謝異常と糖尿病」のなかに「糖尿病の成因」「病型診断」「臨床検査」「合併症」と基本的な記述から始まることで、知識の整理が可能となる。

そして、大きなポイントは「押さえておきたい基本的な検査」である。ここの記載は他の書籍よりも詳細に解説されている。薬剤師が臨床検査値を確認して、患者がどのような状態であるのかが細かくわかる。特に、「糖尿病・糖尿病合併症のフォローアップに用いられる検査」「検査値を解釈するうえでの注意点」は、患者フォローアップには必見である。この項目ではHbA1cの目標を図を示して補足している、また、注意点として生理的変動要因の記載もあり、患者への対話の確認や参考になる。



B5判／259頁

定価：3,960円（本体3,600円＋税10%）

発行：南山堂（2024年10月）

項目の後半では「Advanced Lecture」もあり興味をそそる。「Point」記載は、項目全体をまとめている。これらの構成がすべての章で記載されているため、困ったときの活用に便利である。

最後には「Case Study 現場で薬立つ！検査値の読み方・使い方」の12 Case が事例研究されている。タイトルのとおり「薬立つ！」が実感できる書籍である。

本書は、これからの医療DX化でより患者情報が閲覧できる環境においても、大学で学びきれていない知識や事例を得ることができる。この書籍を使いこなせば、患者フォローのエキスパート、その先のプロフェッショナルリズムを極めることが可能となる。夢の書籍である。

埼玉県病院薬剤師会 会長/埼玉県薬剤師会 常務理事/
日赤薬剤師会 副会長/さいたま赤十字病院 薬剤部長/薬学博士

町田 充